

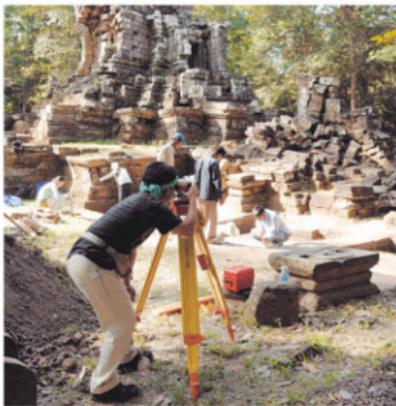
奈文研 ニュース



カンボジアにおける調査

カンボジアの内戦終結を契機として始まった共同研究事業も、早いもので15年目が過ぎようとしています。五里霧中で始まったこの事業も、周囲のご協力を得ながら順調に進み、バントアイ・クデイ遺跡での探査やタニ窯跡群の調査を経験し、2001年度からは西トップ寺院という遺跡を対象に定め、調査研究を進めています。

今年度も7月と12月に考古班が発掘調査をおこなうとともに、1月には建築班の調査もおこなわれました。まず考古班は今年度から中央塔の近くにトレーナーを設定し、建立年代や地下構造の把握を目指しています。2回の調査の結果、今見る中央塔の下では確たる掘り込み地業等は発見されませんでしたが、中央塔が上下2層の整地層の上に築かれていることがわかりました。整地層から出土した中国産と思われる白磁などから、今見る石造建造物は14世紀以後に建立されたことがわかりました。ただ下層の整地層からは12世紀代と思われる青白磁合子が出土して



2007年12月の調査風景

おり、何世紀にもわたる改築の歴史を秘めていることが明らかになりました。

2008年1月におこなわれた建築班の調査では、詳細な図面を作ることを目的とした実測がおこなわれました。実測をしながら各部の細かな観察をおこない、中央塔と南北小塔の細かな様式差を明らかにするとともに、それぞれの建立年代の違いを推定することも可能になります。

今年度にはこうした研究所の調査研究に、所外から大きなご支援をいただいたことも特筆されます。高松塚古墳石室の解体事業で文化庁や研究所の活動に支援をいただいた(株)タダノと(株)飛鳥建設から、カンボジアにおける日本の調査修復活動に対し、車両の無償贈呈の申し出があり、2008年1月31日、(株)タダノ志度工場において贈呈式典がおこなわれました。今回の機材提供によって調査研究活動が飛躍的に進むとともに、将来の事業展開に新たな方向性を与えることとなりました。

(飛鳥資料館 杉山 洋)



(株)タダノによる車両贈呈式典

発掘調査の概要

甘櫻丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第151次）

奈良県明日香村にある甘櫻丘は飛鳥地域や藤原京を一望できる丘陵です。現在は国営飛鳥歴史公園として整備され、多くの観光客が訪れる観光名所となっています。

2005年に丘陵東側の谷地を整備する計画が持ち上がりました。事前に試掘調査を実施し、7世紀の建物群を確認しました。『日本書紀』には蘇我氏が甘櫻丘に邸宅を構えたと記されており、建物群との関係が注目を集めました。

2006年から本格的な発掘調査が始まり、谷を埋め立てる大規模な整地、多くの掘立柱建物、石垣などが確認されました。しかし、谷は全体で6,000m²と広く、蘇我氏との関連の有無を確かめるためにも、さらなる発掘調査が必要です。今回の調査は2006年の調査区と隣接し、約950m²の範囲を設定しました。2007年11月から調査を開始し、1月から冬の現場班が引き継ぎ、現在も調査を続けています。

過去の調査によって、谷は7世紀を通じて活発な土地利用がなされていることが判明しています。建物は、敷地を整地しながら繰り返し建て替えられ、遺跡全体の変遷は十分に解明されていません。今回の調査はこれまで確認してきた建物の規模や遺跡の変遷を整理することが第一の目的です。



発掘調査の様子

傾斜地の発掘は難しく、慎重に掘り下げては清掃し、掘立柱の痕跡を探す作業が続きます。つぎつぎと柱痕跡は見つかるのですが、うまい具合に建物としてまとまりません。毎日、柱の位置を記録した図面を研究所に持ち帰り、並び方を調べて一喜一憂しています。すでにいくつかの建物を確認ましたが、全体の変遷を解明するにはまだ時間が必要です。なお、建物以外にも7世紀末頃の溝、近世の石垣などを確認しています。

2005年の発掘調査でも、昨年の発掘調査でも、現地説明会には5,000人を超える見学者がありました。すでに問い合わせも多く、担当者にとってはかなりの重圧です。しかし、こんなに注目される遺跡を調査できる機会は滅多にないでしょうから、重圧を楽しみつつ、全力で発掘に当たりたいと思っています。

（都城発掘調査部 豊島直博）



溝の掘り下げ



並ぶ柱痕跡

平城宮跡東院地区中枢部の調査

(平城第423次)

平城宮には東に張り出し部（南北750m、東西250m）があり、その南半（南北350m）を東院地区と呼んでいます。都城発掘調査部では2006年度から東院地区の継続的な調査を再開しています。

今回の調査は、2007年9月末から始め、2月下旬で終了しました。2008年1月19日には現地説明会を開催し約800人の方に来ていただきました。

今回の調査ではこれまでの調査と同様に、5時期以上の変遷を確認しました。それぞれの時期において、場所を違えて大規模な建物が造り替えられています。

一番古い1期では南北に廂をつける桁行7間、梁行2間の建物と、桁行9間以上、梁行2間の南北棟総柱建物を検出しました。続く2期では桁行9間、梁行2間以上の総柱建物とその南北に建物を検出しました。この時期にはこれらの建物と併存して石組溝6条と舗装としての礫敷があります。石組溝は底石と側石が残り、とても迫力のあるものです。3期では桁行21間、梁行2間の南北棟とその北端から西に伸びる桁行5間以上、梁行2間の東西棟を検出しました。この建物について現地説明会では長廊状建

物と報告ましたが、補足調査によってこれらは単廊であることが分かりました。東院中枢部の西北隅を形成していたものと考えられます。4期にはこの区域がほぼ空閑地であったと考えられます。最後の5期は桁行14間以上、梁行2間の南北棟建物があり、その西にも南北7間の建物を検出しました。この時期の建物の柱抜取穴には凝灰岩切石が入っており、この時期に凝灰岩で外装した基壇建物があったことが分かりました。また、特徴的な遺物として緑釉壺のほか、灯明皿の下に轡鉄（紐を通して束ねられた状態の銭貨で、和同開珎が確認されている）が納められている遺構（時期は4期以降）も見つかりました。現在保存処理を施しています。

今回の調査でのとりわけ重要な点は、奈良時代後半の短い期間に前代の建物をほぼ全面的に改作している点です。また、大規模な総柱建物や石組溝が多いという特徴は、建物の外を礫敷で舗装していることとあわせて、内裏をはじめとした宮中枢部の様相に類似しています。今回の調査において、建物配置だけでなく、舗装や排水施設など東院地区の生活空間を検討する上での足がかりを得ることができたと考えています。 （都城発掘調査部 浅野 啓介）



第423次調査区全景(正面の森が宇奈多理神社 北西から)



石組溝の外側に広がる礫敷(西から)



日本の文化財保護、アメリカの歴史保存

2007年7月中旬から11月中旬までの約4ヶ月間、フルブライト奨学金を得てアメリカの歴史的建造物の保存の理念と実践についての現地調査をおこないました。学生の頃から数えると日本の歴史的建造物の保存に興味を持って10年以上がたちますが、国宝を頂点とした文化財としての保存と、近年ブームにもなっている古い建物のリノベーションといった普通の建物としての保存の間の隔たりが年々大きくなっているように感じられます。果たして良くも悪くも戦後の日本社会のモデルとなってきたアメリカ社会では、どのように歴史的建造物の保存がおこなわれているのだろうか？ そうした疑問が調査をする動機となりました。

調査の結果、まずわかったことは、日本の文化財という考え方意外にもアメリカの影響を強く受けていることです。文化財を法的に定めている文化財保護法は、昭和25年GHQの指導下でつくられたもので、その際に歴史資料をランク付けして貴重なものを見極めて保護するという、文化財の根幹をなす考え方が決められました。これは文化政策では国家の関与を限定させるアメリカの考え方を強く反映したもので、また文化財という言葉自体も戦前にはなかったもので、法律をつくる際にGHQが文化財の意味で用いていたCultural Resourceを翻訳して用いたものと思われます。

一方、アメリカでは建物や遺跡など土地に根差した文化財と、工芸品や遺物など保管が可能な文化財が法的にも分野としても明確に区別されていて、前者が歴史保存(Historic Preservation)と呼ばれています。その根柢となる歴史保存法は、第二次世界大戦後の急速な都市再開発や道路網の整備によって多くの歴史的建造物や遺跡・景観が失われていくことを憂慮した関係者の働きかけによって1966年に起草されました。その大きな特徴は、歴史保存の考え方を、それまで日本と同じように国家的重要性が高く貴重なものを重点的に保護の対象としていたものから、公共の福祉にあたるものとして現代社会の活動の中で普遍的に保護の対象とするものに転換した点にあります。歴史保存を社会の一部としておこなっていこうとする場合、やはり最大の課題は、歴史



オフィスビル開発とともに保存活用された
ワシントンDCの歴史的な町並み

保存の対象物が歴史的な価値のみならず、それらを資産として持つ所有者にとっての価値や、環境として享受する人々にとっての価値など、社会的に多角的な価値を有していることであって、その活用方法は一概に規定できるものではなく歴史保存の関係者にとって頭の痛い問題のようです。

そうした中でどのように歴史保存の活用がおこなわれているかといえば、活用に対する関係者の様々な主張を踏まえた妥協策をさぐることが最も重視されていて、行政に設置された歴史保存の評議会などでそうした議論が日常的におこなわれています。したがって市中にみられる保存活用の事例は、内部も含めて歴史的な価値を丁寧に保存したもののから外部をおざなりに保存しただけのものまで実に様々で、アメリカでも賛否両論のあるところです。しかし、いずれにしても歴史保存が関与する事業が相当な量であることは確かで、行政や非営利団体のみならず都市開発ディベロッパーや設計事務所などを含め、歴史保存が社会広範に広がる業界のひとつとして成立していることは注目に値するでしょう。こうした状況は、歴史保存の分野がそれらの保存活用において歴史的価値の保存に軸を置きながらも、それらが有する世俗的な価値の調整をはかる責任者として能動的に関与していくことで成立しているといえそうです。

米国の歴史保存の発展は日本の埋蔵文化財行政の発展と似たところがありますが違いも大きく、日米の現代社会をみると上で興味深いものがありました。また歴史保存という考え方には、奇しくも現在進行中の特別史跡平城宮跡の国営公園化の発想と相通じるものがあり、日本の文化財分野が早急に検討すべき課題を含んでいるように強く感じています。

(都城发掘調査部 金井 健)

日韓発掘調査交流を終えて

2006年度に、奈良文化財研究所と大韓民国・国立慶州文化財研究所との間で「日韓共同発掘調査交流協約」が締結されました。これに基づいて2006年度より、それぞれの研究所の研究員が、一年に一度、双方の研究所に2ヶ月程度滞在するという形の交流が行われています。私はその日本人2人目の交換研究員として、2007年9月18日から11月15日まで、国立慶州文化財研究所に滞在しました。

慶州でいくつかおこなわれていた発掘現場の中で、私は四天王寺址と月城塚の発掘調査に参加しました。四天王寺は7世紀後半に創建され、韓半島で唯一金堂二塔形式の伽藍が初めて採用された寺院です。戦前に緑釉・褐釉を施した四天王像壇が出土したことで大変有名です。また、月城は新羅の王宮で、その周囲を巡る濠を韓国語で塚と呼びます。濠は4世紀頃から統一新羅にかけて何度か作り変えられています。いずれの遺跡も、日本、ひいては東アジアの古代文化を考える上で非常に興味深い遺跡です。

特に四天王寺址は遺構の遺存状態が良好で、建物の基壇の高まりが1mあまり残っていたり、礎石の大部分が元の位置に据わっていました。日本でもなかなか発掘することができないような、考古学者や建築史学者垂涎の素晴らしい遺跡です。

2006年には西塔・西面回廊の調査をおこない、今回は金堂の調査がメインとなりました。調査の結果、金堂の規模や構造を具体的に確認することができました。さらに、戦前の調査では不明確だった階段の構造までも明らかになりました。

現場での作業は大変楽しいものでした。基壇土の掘削中に、緑釉壇の破片が多く出土して大変興奮し



四天王寺址調査前全景（上が北）



慶州の位置

ましたし、調査の進め方を確認し合う中で、それぞれの国の調査方法や遺跡に対する考え方少しづつ違うことを、日々、学ぶことができました。また、研究員や作業員の方々は根気強く私のカタコトの韓国語を聞き取ろうとしてくださったうえに、測量や実測など、様々な仕事を一緒に取り組もうとしてくださいました。測量は複数の人がチームとなっておこなうため、韓国語がちゃんと理解できていなければ、正確な記録を残すことができません。その調査にとって致命的なミスをひきおこさないと、作業中は終始緊張していたように思います。

今後も継続して、日韓発掘調査交流を中心とした共同研究を進める予定です。2008年の1月～3月には、韓国から2名の交換研究員が来日し、甘樺丘東麓遺跡や、平城宮東院地区の発掘調査に参加しました。日韓の研究員がお互いの発掘調査に参加することは、研究成果を生み出す過程の共有につながり、両研究所にとって大変刺激のある交流であるといえます。このような交流を踏まえて、大きな研究成果があがることが期待されます。

（都城発掘調査部 中川 あや）



四天王寺発掘調査チームと（中央が筆者）

藤原宮大極殿院出土の地鎮具

2007年の大極殿院南門の調査（飛鳥藤原第148次調査）で出土した地鎮具です。大極殿院南面西回廊を築く際の地盤となつた宮造営時の整地土を掘り込んだ土坑の中に置かれていました。出土した当時、須恵器の平瓶の内部には後に流入した水がたまり、口縁部にも土が詰まっており、CTスキャンやX線透過写真によって、平瓶内部の内容物の調査をおこないました。その結果、口縁部に富田錢が9枚、胴部の中にも水晶原石が9点おさめられていましたことが明らかになり、藤原宮の造営に伴う地鎮具と判明しました。『日本書紀』に持統6年(692)5月に「藤原宮地を鎮め祭る」という記録があり、関連が注目されます。また、日本古代の都城や宮殿跡において確認された最古の地鎮具です。

(都城発掘調査部 高田 貴太)

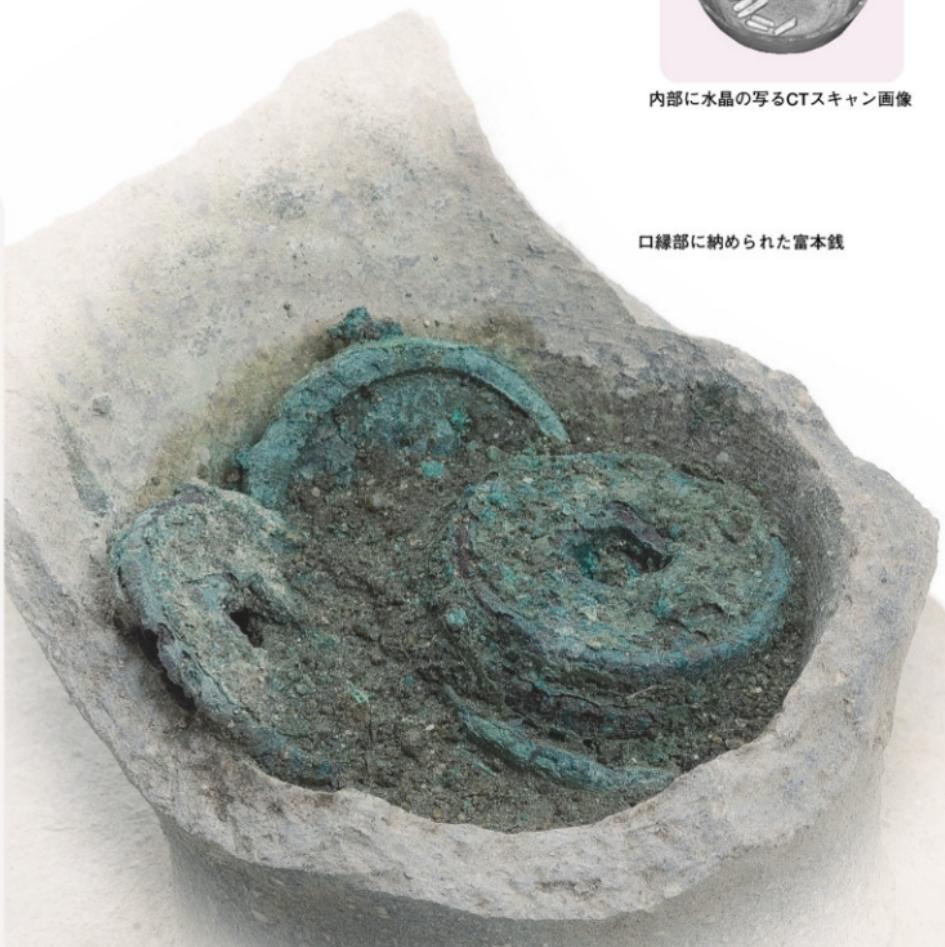


出土した地鎮具（最大径20.2cm）



内部に水晶の写るCTスキャン画像

口縁部に納められた富本銭



京都府近代和風建築総合調査

文化遺産部建造物研究室では、現在、京都府内の近代和風建築の調査を、京都府からの受託調査事業として実施しています。京都近郊4大学による府全域の悉皆調査を経て、200件あまりに絞り込まれた重要物件の詳細調査が、受託内容になります。この調査は文化庁からの補助を受けておこなわれている事業で、都道府県単位で順次実施されており、京都府はいわば残された大物でした。

奈文研が近代の建築を調査するということを意外に思われる方があるかもしれません、実は結構経験があります。近代化遺産調査として秋田県、鳥取県、近代和風建築調査として滋賀県、鳥取県で調査の実務をすでに担当し、成果を挙げてきました。

この「近代和風建築」ということばには、聞き慣れない響きを感じられることでしょう。明治から昭和初期にかけて、伝統技術ないし伝統を意識した造形により建てられた建築群を一括りにして、建築分野でこのように呼ばれています。「和風」という語は、今はごく一般的ですが、建築に限れば、実は近代になってから使われ始めたことばです。幕末に日本に導入された西洋建築を「洋風」と呼び始めると、逆に日本にすでにあった建築を一括りにする語が必要となり、「和風」の語が登場したわけです。そこにさらに「近代」が付加された「近代和風」は、二重に近代が意識された語ということになります。

これは、近代建築の研究が、洋風のみ先行して進められてきたことと関係しています。近代＝洋風という先入観がまず形成され、「和風」の語は、伝統的な形態全般を指す、緩やかな概念として認識されるようになりました。近代における和風建築といふと、時代遅れの保守的なもの、といった程度の受け止め方しかなされなかつたのに対し、1980年頃よりその価値を再認識した研究者たちが、こうした先入観を打ち破るべく、あえて「近代和風」という少々くどい語を造語したのでした。つまり、「近代和風」という概念は自明なものではなく、いまもって、今回のような調査を実施しながらその輪郭を描いていくべき、研究途上にある概念なわけです。

さて、京大工、京普請といえば、すぐに数寄屋普請のイメージが浮かぶように、京都の近代和風建築というと、なんと言っても数寄屋造の邸宅群を挙げ

ねばなりません。南禅寺旧境内、嵐山周辺などには、珠玉の別邸群が数多く現存しています。政治家や、住友、野村、三菱といった旧財閥、織維・織物業関係者、画家など、名だたる名士の別邸が、植治に代表される庭師による広大な庭をともなって、きら星の如く立ち並ぶ様は、圧巻の一言に尽きます。京都の近代数寄屋は、京大工と新興富裕層との出会いによって花開きました。派手さを好まず、端正な比例、嫌みのない樹種の取り合わせによる、一見簡素ながら、隙のない濃密な空間をその特徴とします。また、構造的創意を背後に隠したさりげない開放感も、その奥深い伝統を彷彿とさせます。

数寄屋造と双璧をなすのが、社寺の建築です。京都の有名社寺には、意外なほど多くの近代の建物があります。東本願寺、東福寺、金戒光明寺、仁和寺など、枚挙にいとまがありません。京都は明治30年より開始された古社寺修理の中心地の一つでした。その監督技師を勤めた建築家たちは、古社寺の造形に学び、古代中世を復興しつつ、西洋建築をも含めて各時代、様式を自在に折衷した新しい表現を生んでいました。古都としての京都のイメージには、意外に近代の造形が寄与する面が多いわけです。

洛中の代名詞ともいえる京町家も、調査対象となります。市内中心部は元治の大火（1864）で大半を焼失したため、京町家は実はほとんどが近代和風建築なのです。そしてもちろん、京都市以外の丹後、丹波、山城南部にも個性的な建物が数多く残されています。

京都は近代和風建築の典型を、各類型、まんべんなく伝える希有な地です。その魅力を存分に表現することで、近代という時代への多様な解釈を生む震源地となるような報告書の出版をめざし、日夜努力中です。

（文化遺産部 清水 重敦）



何有荘（旧福島勝太郎邸、明治44年、京都市左京区）

【退職者のひとこと】

定年を迎えるに当たって

1976年入所以来、平城宮跡発掘調査部で19年、飛鳥藤原宮跡発掘調査部で合せて6年、埋蔵文化財センターで6年、合計31年間、他機関への転職もなくずっと奈文研でお世話になりました。

幸運なことに良き上司、同僚、後輩に恵まれ、楽しく過ごさせて頂いた年月でした。ここに紙面をお借りして衷心より感謝の意を表したいと思います。

この間、多くの方々から貴重な御指導を頂きましたが、中でも印象深く忘れ難い、その後の人生を導いた叱咤激励をここに披露します。

5代前の所長坪井清足さんは、今は好々爺で優しく接して貰っていますが、私が入所した当時の坪井さんは、「悪足（あくたれ）」と諱名され、と言うよりも本人もそれを自認甘受していましたが、遠慮容赦なく、ものを申す人でした。ある時、多分、酒席の場で、見聞を広めようとしない我々若い連中を咎めて、「奈文研に入ったからといって研究者面するな。お前らは解るかどうか分からない耶じゃ。受精卵かどうかも分からん。」確かにこんな風な前言の後、優しく井の中の蛙になるな、客観的な判断ができるよう見聞・素養を高めよと説教して頂きました。ともかくも、受精卵で誰には解ったと自負していますが、果たして親鳥になれたかどうかは甚だ疑問です。残りの人生も親鳥への途を目指して生きて行こうと思っています。

我々が入所した時代は、研究所の絶頂期であります

したが、その後、定員削減、行財政改革、国家公務員制度改革のありをとともに被り、組織も改変されました。私たちの世代は、奈良国立文化財研究所の時代、東文研と統合した独立行政法人文化財研究所の時代、国立博物館と統合した独立行政法人国立文化財機構の時代を経験してきました。人から度々「行政法人になってどうですか。どの時代が良かったですか。」と尋ねられことがあります。私自身、同じ立場で3つの時代を経験してきたわけではないので、答えに窮りますが、当初の独立行政法人の謳い文句と違い、国立時代より一層縮め付けが厳しくなり、融通性がなくなりましたと答えています。でも、良いものもありました。東文研と一緒にプロジェクトを組み仕事を進め行く間に、多くの方々と知己になり、新しい刺激を受け、発想も豊かになりました。国立博物館と統合してからまだ日が浅く、館員の方とほとんど交流できず残念に思っています。最後に一言。奈文研永遠なれ。　（副所長　巽淳一郎）

退職挨拶

考古学や埋蔵文化財保護に携わる職務に35年間就いて定年を迎えた。大学の考古学研究室の助手、宮城県立東北歴史資料館の考古研究科、文化庁で埋蔵文化財担当の調査官、奈文研の部長職を勤めてきた。子供のころ、郷里の裏山で土器や石器を拾っていた私が、職業として考古学研究や遺跡の保護行政に専心してこられたのは、大変に幸せであった。

捏造された遺跡で30年近くも騙されてしまい、多くの方々に大変なご迷惑を掛けてしまったが、日本



左から、高瀬文化遺産部長、巽副所長、岡村企画調整部長、光谷年代学研究室長、安田埋蔵文化財センター長

列島人の起源、縄文時代の貝塚などの研究に直接携われ、ロシア沿海州の貝塚発掘や中国内モンゴルの初期新石器時代遺跡の発掘調査にも参加できた。文化庁に移ってからは、多くの遺跡の保存や保護行政のシステムや標準作成、「発掘された日本列島展」、

「阪神淡路大震災に伴う復興・復旧事業に伴う発掘調査」支援などを、手がけることができた。研究的には主に縄文時代の遺跡や文化を総合的に捉えて復元し、成果を広く普及し、文化財についての理解を深めるなどのパブリック化に努めてきた。このような仕事の延長で、文化財保護に資るために平成14年から奈文研にお世話になることができた。

奈文研では、『曙光の時代－日本考古学の連続と変革－』展をドイツで開催し、奈良博で帰国展もおこなえた。キトラ・高松塚古墳の保護などについて文化庁や自治体、マスコミなどとの対外的な調整、所内の連絡調整をおこない、自己点検委員会の担当ともなった。また平城宮跡については、最も不案内の私が、平城宮跡発掘調査部長となり、大極殿の復原研究の連絡調整も担当させていただいた。どの職務についても十分な役を果たすことができず、申し訳なく、心残りである。

日本の考古学、埋蔵文化財など保護行政での研究的リーダーとして活躍し、私が研究を志した時から憧れであった奈文研で、曲がりなりにも6年間仕事をさせていただいた。その間大変勉強になったし、純粋な研究もすることができた。ありがとうございました。今後とも奈文研が、日本の文化財研究のリーダーとして、国際的にもますます活躍されることを期待したい。

(企画調整部長 岡村 道雄)

趣味と実益を兼ねて結構ですか

“趣味と実益を兼ねて結構でんなあ！”発掘調査が仕事だと言うと、人から言われることがあった。そんな時は“仕事となると苦労も多く大変ですよ”と答えていた。これで給料をもらっている身としてはまさか“楽しいですよ！”とは言えない。本当のことを言うと、発掘調査は肉体的にはシンドイ面はあるが、精神的には楽しい仕事でした。

初めて発掘調査を経験した平城ニュータウン予定地における奈良山瓦窯の分布調査、当時の奈文研では遺物として取り扱わなかった近世の赤膚焼のカケラを嬉々として拾い集めた平城宮内の現状変更現場、

保存状態の良さに感激した薬師寺西僧坊跡、初めて担当した平城宮中央区朝堂院東第一堂地区、一人で現場を担当していくなり墨痕鮮やかな木簡に出くわしあせった御前池の現場、などなど走馬燈のようによみがえってきます。

発掘調査をおこなうかたわら、平城宮跡発掘調査部計測修景調査室の一員であった私は平城宮跡をはじめとする遺跡の整備計画立案作業、庭園の実測調査、写真測量などに従事しました。

遺跡の整備計画はものを作る作業です。自分の頭の中でイメージした姿が現実の形となって表れるのですからこんな楽しいことがあるでしょうか。平城宮跡で私が初めて実施設計に近い図面を描いたのは佐伯門に入ったところにある予備駐車場です。テニスコートとしても使える設計でした。これなどはなんの変哲もない舗装された広場ですが、でも作る喜びはありました。覆屋の西側に作った案内広場も苦労した思い出です。頭塔の復原整備も発掘調査と併せて心に刻まれています。

庭園の実測では東大寺知足院、長崎県五島の石田城庭園、滋賀県の庭園群などが強い印象に残っています。庭園の実測は落葉樹が葉を落とした冬から春先が見通しよく、この時期におこなうのが常道です。しかし、この時期はまた花粉症の季節でもありました。庭園はいわば花粉の巣窟ですから、ひどい花粉症の私は鼻水を垂らし泣きながら(?)実測したものでした。

写真測量では桂離宮書院、平泉觀自在王院や沖縄識名園などの庭園石組、薬師寺の薬師三尊像、春日大社の鼈太鼓、奈良井宿などの伝建地区町並、沖縄座喜味城石垣などを実測しながら長い時間をかけて間近に見るという貴重な経験もしました。

奈文研へ来て35年が経ちました。生来粗忽な私は失敗もあり、先輩や同僚に助けられたこともありました。皆様に篤く御礼申し上げます。

(文化遺産部長 高瀬 要一)



退職を迎えてー現場の思い出から

1975年に入所し、平城に7年、藤原11年の後、奈良市に5年勤め、奈文研に戻って、藤原8年、最後に埋文2年で定年を迎えました。発掘部門が長く、楽しい年月を過ごさせていただきました。

初めての担当者を経験した宮跡庭園（結局取り壊しとなった奈良市史跡文化センター）、「和同開珎」鋳型が出土した奈良郵便局、複雜極まりなかった石神遺跡、とにかく大変だった飛鳥池遺跡、新しい知見が続いた藤原宮朝堂院や、私の最後の発掘となつた高松塚古墳丘の調査などが特に印象的です。



1990年12月1日 石神遺跡現地説明会にて

「和同開珎」鋳型は、現場での休憩時間中の「排土の投げっこ」での発見でしたが、これで「仕事・発掘は楽しくやらなくては」と思いました。藤原では何かについて分布調査に出かけ、「土産」に食材を持って帰ってきたものです。石神遺跡の現場がテレビドラマのロケ地になったこともあります。遊び心・余裕は新しい発見・発展には必要なことではないかと思います。時代の流れとはいえ、大忘年会や運動会がなくなつたことはさびしいことです。

それと、伯耆国庁・神野向遺跡・結城廃寺などいわゆる外部調査も思い出深いものです。当時でも調査部内で外部調査の是非について議論がありました。地元の研究者との共同作業はとても貴重な経験です。海外との共同研究が多くなっている中で、困難な面もありますが、発掘調査から整備まで遺跡に関わる体制がぜひ必要かと思います。

昔はよく引越しに行きましたが、現在の本庁舎と藤原の新庁舎への引越しの両方を経験しました。残念ながら念願の新しい本庁舎への引越しの手伝いはかないませんでしたが、一日も早く実現し、奈文研の新たな進展の契機になることを祈っています。

長い間お世話になりありがとうございました。

(埋蔵文化財センター長 安田 龍太郎)

33年間を振り返って

1975年4月に入所し、配属された研究室は、計測修景調査室（当時）で、室長は牛川喜幸氏、室員に田中哲雄氏、高瀬要一氏、研究補佐員として福原まり花さんがいた。また、当時埋蔵文化財センターにおられた今は亡き伊東作氏、庶務課の渡辺康史氏、考古第一調査室の佃幹雄氏らに目をかけてもらったことがあります。大変なつかしく思い出される。

緊張した面持ちで初めて研究室に顔を出した日、田中さんからいきなり足のサイズを聞かれ、ビックリした。それは、当時、研究所で盛んであったサッカー部への無言に近い誘いであった。



遠慮祝いのユニフォームで高瀬文化遺産部長と大雨のなか、牛川さんの後任室長の安原啓示氏と2人だけでサッカーボールを蹴り合つたこともなつかしく思い出される。

研究面では、計測修景調査室にいた5年間、平城宮跡の発掘調査に従事するかたわら、写真測量の手伝いで沖縄のグスクや奈良県五條市の町並み、鳥取城の石垣調査などに同行したことなど、楽しい現場ばかりであった。しかし、1979年の秋には、その後の人生を大きくかえる出来事があった。当時の所長、坪井清足先生から、突然「オイ。光谷、デンドロをやらないか。」と言われたのに始まる。これは、年輪年代学の研究をやるようという御達しであった。1980年4月からは埋蔵文化財センターに移り、年輪年代学の研究を本格的に開始した。当初、田中琢先生や佐原真先生の叱咤激励を受けたのも、今では思い出深い。年輪年代法が今日のように確立できたのも奈文研にいたからできた研究だと思っています。今後とも、奈文研の大いなる発展を期待します。

33年間もの長きにわたって、皆様からいただいたご厚情に対し、ここに心より感謝申し上げます。

(埋蔵文化財センター年代学研究室長 光谷 拓実)

飛鳥資料館春期特別展のご紹介

「キトラ古墳壁画十二支一子・丑・寅一」

平成20年4月18日(金)～6月22日(日)

うち5月 9日(金)～5月25日(日)

キトラ古墳壁画 子・丑・寅 特別公開

今年も春の訪れとともに、飛鳥資料館では、文化庁のご協力のもと、キトラ古墳壁画に関わる特別展を開催いたします。昨年の白虎、昨年の玄武にひきづき、今年のテーマは十二支です。

キトラ古墳の十二支像は、平成13年12月の第4次内部調査で確認されました。この十二支像は、頭が動物で、人の体をもつ、いわゆる獸頭人身十二支像です。日本の極彩色壁画古墳である高松塚、キトラ両古墳のうち、キトラ古墳にだけ描かれており、その特徴の1つとなっています。

東アジアの古代世界に目を向けると、獸頭人身十二支像は、中国の隋代に長江中流域で出現し、唐代や韓国統一新羅時代に盛んにつくられました。その姿や性格には、地域色や年代差を見出すことができ、キトラ古墳壁画のルーツを探る有力な手がかりといえます。

今回は、中国の十二支鏡、道教鎮墓石や十二支俑、韓國慶州の金庾信墓、掛陵、遠願寺石塔など

に彫られた十二支の拓本と写真、奈良の隼人石の拓本や榮山寺の十二神将像(重要文化財)などを展示し、東アジア各地の十二支に迫るとともに、キトラ古墳の十二支像との比較を試みます。獸頭人身十二支像を通じてみえてくるキトラ古墳壁画の真実をお楽しみください。

(飛鳥資料館 西田 紀子)



キトラ古墳壁画 実物

■ 記録

埋蔵文化財担当者研修

○遺跡整備活用課程

平成20年1月15日～25日 14名

○堅穴建物遺構調査課程

平成20年2月4日～8日 10名

○地質環境調査課程

平成20年2月21日～28日 16名

現地説明会

○飛鳥藤原第150次(石神遺跡第20次)

平成19年12月15日(土) 867名

○平城第423次(東院地区中枢部)

平成20年1月19日(土) 819名

飛鳥資料館展示

冬期企画展「飛鳥の考古学」

平成20年1月4日(金)～2月3日(日)

巡回展示「絵でみる考古学－早川和子原画展」

平成20年2月9日(土)から3月2日(日)

○ギャラリートーク

平成20年2月23日(土) 早川和子

高松塚古墳シンポジウム

平成20年1月26日(土)

主催：文化庁、国立文化財機構奈良文化財研究所、

東京文化財研究所、奈良県教育委員会、明日香村

於：橿原文化会館大ホール

第一部：「石室解体レポート」

第二部：パネルディスカッション

平城宮跡歴史文化講座(第4回)

(NPO平城宮跡サポートネットワークと共催)

平成20年1月27日(日)午後1時～

於：平城宮跡資料館講堂

「木簡からみた文字文化」

東野 治之 奈良大学教授

編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2008年3月